学生会議通信
NO.35
68.12.30
東京教育大学
学生会議

大学当局の入試中止を利用したスト収拾

策動を粉砕せよ！

政府文部省と大学当局の入試中止をテコとした休校・閉鎖ー大学再編（移転の実質化）策動粉砕！

全ての学友諸君！　昨日我々は対文教省抗議斗争をその先頭に立って斗った。だが三〇余名の結集という事態に明確に示されたように、その斗いそのものが、現在の我々の斗いの問題点の、その弱さの集約をなしていた。即ち「越冬」ならぬ「冬眠」を決めこんでいる和改二派系諸君の斗争放棄と「入試中止反対」なる方針の草マル系諸君の取組である。昨日の我々の斗いが、抗議にとどまらぬ抗議斗争としてしか勝ちとり得なかったことを全学斗そのものの弱さとして把えかえし、深刻に総括していかなければならない。

〈全学共（革マル系）の「入試中止反対」路線の誤り〉

全学共系諸君は、この入試中止という新たな事態に対して、「この入試中止の策動を……筑波移転を強行的に推し進めようとする当局と文部省の一体となったところのあくなき野望の現段階的表現として、そして更には……将来的には文部省の胴喝により行なうかもしれないところの休校、閉鎖を通じての教育の帝国主義的再編のワンステップとしての策動としてとらえなければならない」（29日全学共ビラ、傍点学生会議）と分析している。

彼らの根本的な情勢分析における限界性は、「場所的現在」における策動としての「入試中止」と、将来的に行うかもしれないところの、彼らの好きな言葉で云えば「坂田文相の頭の中にある」攻撃としての「休校、閉鎖」という様に「場所的現在」と「将来的に行うかもしれない」ものとに当局と文部省の攻撃を機械的に分離してしまうことである。その為に彼らは、我々がこの両者を連鎖的環として、しかも当局が両者を結合させて我々に攻撃をかけてくることを、明確に把握して、そして更には、こうした策動を推進派が実体的に担うことにより、文部省の新たな強権的、暴力的な大学閉鎖ル大学再編の策動をも平行的に行ってくることの分析を通じて、我々が「入試中止反対」を粉砕せんとしたこの策動の本質を、「ワコにした大学休校、閉鎖ー帝国主義的再編粉砕」（それは別の形態における、ドラスチックな筑波移転の実質化なのだ!!）し、「入試中止を利用したストライキ収拾策動粉砕」というスローガンを、まさに現段階における全学斗のとるべき緊急の任務として提起している意味が全然理解できないのだ。だから、その機械的な構造のヤブにらみから、我々に対して「入試に対する現在的な対決を、将来起り得る事態に対する対決へと歪め」ているなどという、トンチンカンな「批判」をなすことができるのだ!!

こうした彼らの誤りは、24自段階には「入試中止↓自動解体待ち」へ革マル主義とピントのボケたことを云っていたくせに、「入試中止」ということを当局の「あくなき野望の集約」などという文学趣味によって、それ自身は全く無内容な規定しかだし得なかったことにも示されている。彼らは、「入試中止」という攻撃を休校、閉鎖という攻撃と時間的にも現在ー将来と振り分けることによって、結局のところ、「入試中止」は移転推進の野望の集約へ現段階的表現」なのだから、現在は「入試中止反対」なんだという、まさに単純対応主義にいきついたのだ。

こうした無内容な運動に最後の鉄槌を加えるために、「入試中止」の持つ意味を再度明らかにしておこう。当局が反対収拾策動が結果的には貫徹しえなかったという現実に目をつぶって、彼らの思惑からすれば従来の様に「正常な形」で入試が実施できないこと、へその為には正論、4論、本論占拠の解除とストそのものの収拾のメドが必要であったが故に、そして文部省はこの条件を満たさないなら入試は認めないという断固たる態度をとっていたが故に、こうした現実において、一面においては、彼らにとって不満なる政策であったと同時に、他面において、逆にこの入試中止を大学休校或は閉鎖という問題と

結合させることにより、大学の社会的責任云々とか、ストライキなこのまま続けば大学がつぶれてしまうだぞという形で、我々に恫喝をかけ、ストライキそのものを終結させようとする、その一体化した攻撃としてあるのであり、我々にとって重要なのはこの攻撃に対決し、粉砕していくことなのだ。

次にこうした大学当局の策動そのものが、推進派をその実体的担い手としつつ、その策動そのものが我々の反撃によって貫徹しえないならば、同時に休校・閉鎖をもって、筑波移転の別の形態における実質化としても、そうしたことをも狙って、なされていることを我々は明確に把えておかねばならない。既に政府文部省は二五日において、東京大学に対して、入試中止をテコにしてへそれが今や現実のものになっているのだ!!)、東大閉鎖から駒場の単科専門大学化と、本郷の大学院大学化というドラスチックな大学再編策動を赤裸々にしているし、上智大学においては、官憲の導入をもっての暴力的な斗争破壊と大学の休校を持って、産学協同の貫徹とそれに伴う学部、学科、カリキュラムの根本的な改悪な現実化されつつあるのだ。こうした策動から学ぶなら、又移転推進派なそうした策動の先頭を切り、そして評議会内におけるヘゲモニーを文部省の支持のもとにとりつつあることをみるなら、我々は当局と文部省の入試中止をテコとした休校、閉鎖―別の形態における筑波移転の実質化に対する斗いを、今まさに斗っていかなければならないのだ。まさにかかる関連、「入試中止策動」が策動として物質化されつつあることを見抜けない全学共系諸君だけが、我々の斗いを「将来的に行うかもしれないところのもの」対する斗いなどと云って、日和見を決めこんでいられるのだ。

〈村改系諸君の斗争放棄〉

29日の対文部省抗議斗争において、村改諸君の指導の放棄と運動のパンクは、最早誰の眼にも明きらかになった。彼らはこの間戦術形態の左傾化を大胆に提起することによって、民青系諸君に対する反発を吸収しつつ、全学斗指導部たり得ていた訳だが、それが二六守位所斗争の敗北によって、なしえなくなることによって、その矛盾を拡大してきた。即ち二八回答に対する対応から一七確認拒否に至るまでの彼らの猫の眼の様ななし崩し的な方針の修正な含む問題である。二八回答を基本的に受けいれるという点において、まさに民青系諸君との根本的な対決を日和り、六項目か七項目かと云う同一の土俵でしか斗いえず、まさにそうした斗いへ自ら落ちこむことによって、全学斗のヘゲモニーの后退を許してきたのである。又大衆団交の主体を明確に全学斗とするのではなく、「七項目を要求する学生」などという民青系諸君にすら見すかされるマヌーバーで持って対応しようとしていたのである。

こうしたあいまいもことした方針に対する我々を中心とした戦斗的学友の突き上げによって、初めて全学斗による大衆団交要求が現実の方針として勝とられたのである。こうした自己のジクザクを事ム局多数派としての大衆に対する責任として、又運動路線そのものの破産として深刻に総括しえなかった点に、今日の彼らの斗争放棄の根拠があるのだ。

「冬休み」は人が集まりにくいという客観的傾向から、直ちに「越冬体制」が叫ばれた訳であるが、それは、一二月における敵の攻撃を前にして全く無力なのだ。まさに村改系諸君は「越冬体制」ならぬ「冬眠体制」を真に実践している訳だが、それは越冬を一二月における斗いの発展として、具体的に必要な斗争の連続として把えるのではなく、最初から斗い得ないものとして設定し、最低限の泊りこみ体制を確保するのに汲々としていたが故に、そうした泊りこみそのものも逆に明確な方針がないが為に貫徹できないという悲劇を生み落しているのだ。

敵の攻撃が入試中止をテコにして、更に強化されている中にあって、それを粉砕していく斗いを抜きにして、どうして今后の斗いの発展を「一月斗争の爆発」を勝とっていくことができると云うのか!?

〈一月斗争の一大爆発を勝とれ!〉

全ての学友諸君、既に明きらかにした様に我々の斗いは敵の攻撃の激化と全学斗内部の日和見主義の発生という重大な危機に立っている。だが一二月斗争の先頭を担ってきた我々は、こうした傾向と断固として対決しつつも、彼らを巻きこんで、大学当局の策動と、そして又日共民青系諸君の「入試をやれ」「大学を守れ」という全く筑波移転阻止とかけはなれた地点における右翼的な策動と対決し、これを粉砕してゆかなければならない。この斗いの再出発点を一月四日の総決起集会の大衆的爆発をもって勝とり、そうした斗いの前進にふまえた上で、守位所再拠等の更なる戦術エスカレーションを断行し、当局に打撃を与えていかなければならない。

大学当局の入試中止を利用したスト収拾策動粉砕
政府文部省と大学当局の入試中止をテコとした
休校・閉鎖―大学再編(筑波実質化)粉砕
日共・民青の「入試要請」「大学を守れ」運動粉砕
六・一〇決定白紙撤回
筑波移転実力阻止
先進的学友は学生会議に結集せよ

〈一月四日全学斗総決起集会に結集せよ〉